

シュトルムの『管財人カルステン』について

—— 名前のこと, 男女関係の構造のこと ——

三浦 淳

1. 名前について

この小説の出だしを読んで一瞬不思議な気分にとらわれない読者がいるであろうか。

本当は彼は Carsten Carstens という名で, 小市民の息子であった。(7)

Carsten Carstens とはつまり Carsten 家の Carsten ということであり, ファースト・ネームとファミリー・ネームが一致することになる。Carsten とは Christian の低地ドイツ語形であり, クリスマスが二回続くとなれば随分と敬虔な名前で, 結び近くで聖書の言葉が引用されるこの作品の主人公に相応しい名づけ方ということになるのかもしれない。

ファースト・ネームとファミリー・ネームの一致ということから見ていくなら, このこと自体は西洋人に時折見られる現象であるから, とりたてて騒ぐほどのことはないという考え方も可能である。例えば現代の著名な心理学者の Erik Erikson である。これは, エリクの息子であるエリクということになる。或いは, 地動説をめぐる裁判で有名な十七世紀の学者 Galileo Galilei にしてもそうで, Galilei は Galileo の複数形であるから, ガリレオ家のガリレオということになる。これは, 彼の生まれたイタリア・トスカナ地方に, 長男に対してその家のファミリー・ネームをそのままファースト・ネームとしてつける習慣があったためにこうした名前になったらしい。

Carsten Carstens という名の背景にも或いはこうした事情があるのかもしれない。フーズムの町にそうした習慣があったのかなかったのか, 不勉強な筆者は詳かにしない。しかし仮にあったとしても, そのことからただちにこの名前を実証的観点からのみ片づけてすむとは思われない。シュトルムにはこの

ほか「Pole Poppenspaler」の主人公を Paul Paulsen とした例があり、少しワクを広げて考えれば、最後の作品「Der Schimmelreiter」の主人公 Hauke Haien にしても Ha-Ha の組合せでこれに類したものと考えられるのである。こうした一種の頭韻 Alliteration は題のつけ方にも見られる。「Pole Poppenspaler」を始め、「Hans und Heinz Kirch」や「Bötjer Basch」などが挙げられよう。以上のような名前や題のつけ方には Wortspiel 的なものが感じられるし、実際シュトルムがそうした傾向を持っていたことは「Viola Tricolor」に登場する二人の女性、少女 Nesi とその義母 Ines の名がアナグラムによって同一のものだと暗示されていること (II, 414) から明らかである。とすれば、『管財人カルステン』の主人公の名に少々こだわってみるのも全くの牽強附会とは言えないだろう。

主人公の名前ということですぐ想起されるのは トーマス・マンの『トーニオ・クレーガー』の場合である。この小説は主人公のトーニオが帰校時に友だちを待つところから始まる。友人の方は一緒に帰る約束をしたことすら忘れていた訳であるが、とにかく一緒に帰ることになる。ところが途中別の同級生が近づいてくると友人は急に主人公を Tonio というファースト・ネームでなく、Kröger というファミリー・ネームで呼び始めるのである。同級生が行ってしまうと彼は言い訳をして次のように言う。「Kröger って言ったのはね、君の名前がとても変だからさ。許してくれ給え。だけど僕は嫌いだよ、君の名前は。Tonio ってのは…名前じゃないぜ、こいつは。勿論君のせいじゃないけどさ」それに対し主人公の方はこう答える。「そうだよ、嫌な名前だ。実際僕だって Heinrich とか Wilhelm とかいうほうがずっといいんだ、本当だぜ。だけどお袋の兄弟で僕の名づけ親になった人が Antonio っていうもんだからね。お袋はずっと遠くから来てるだろ…」²⁾

Tonio というラテン系のファースト・ネームと Kröger といういかにも北ドイツ的なファミリー・ネームとのアンバランスが、そのまま、市民と芸術家の狭間で懊悩する主人公の性格を暗示している訳であるが、ここで問題にしたいのは「君の名前がとても変だからさ」という友人の方の名前なのだ。彼は Hans Hansen という。Hans は極くポピュラーな名前だが、もとは Johannes の短縮形であり、Hansen の方は Johannsen つまり Johannes Sohn から来ており、特に Schleswig-Holstein 地方に多い名前なのである。³⁾

この名前の選択は偶然であろうか。もともと『トニーオ・クレーガー』という作品へのシュトルムの影響を、マン自身否定してはいないのである。1930年のシュトルム論の始めのところで、Tonioの父親の姿はシュトルムとツルゲーネフによってつくられたと述べている。⁴⁾ また、第2章にはTonioがシュトルムの小説「Immensee」や詩「Hyazinthen」を思いおこすシーンがある。⁵⁾ こういったことからしても、シュトルムの故郷 Schleswig-Holsteinに特に多いという名を、マンの故郷リュベックと思しき町に住む少年につけたことには何か含みがありそうに思われる。そしてファースト・ネームとファミリー・ネームの一致が両者に見られるというのも、偶然と言って片づけてしまうにはためらいが残る。

Hans Hansen⁶⁾ という繰り返しの名について或る研究者は次のように言っている。⁷⁾ 主人公Tonioと対照的に、矛盾の狭間で悩むことのない彼の特質を暗示したものである、と。『管財人カルステン』の主人公Carsten Carstensについても、同じような事情が考えられはしないだろうか。といて、『トニーオ・クレーガー』のHans Hansenのように、Carstenが単純で調和的で、はなから自己同一性を疑わない人物だということではない。彼の北方的な同一性——故郷の町に定住していること、堅実な職業、堅実な結婚、不正や享樂を忌み嫌う性格、質素で足が地についた暮し——は、ここでは、揺るぎない自明のものとしてあるのではなく、揺さぶられ失われ、一生かかって克ちえられるものとなっているのだ。そうした自己同一性をめぐる戦いに相応しい名前、それがCarsten Carstensという繰り返しの名前なのではないだろうか。

『管財人カルステン』が自己同一性をめぐる戦いの物語であるということは、これがフーズムの町にとって異物であるものを排除していく物語であることから明らかであろう。主人公Carstenが結婚することによってこの一家に異物がはいりこむ、そしてそれを最終的に排除する、というのがこの小説の筋立てなのである。Carstenの結婚相手のJulianeは、大陸封鎖時代、投機で一儲けするために外国からやってきて、失敗したあげくに自殺した男の娘である。その男の死後の残務整理を依頼されたのが、彼とJulianeとの出会いのきっかけだった。Carstenは初め「あの連中とは関わりを持ちたくない」と言って仕事を断わる。(9) 外国人であること、投機家であること、これは北ドイツの町で堅実な生活を営む人間にとっては異物以外の何物でもない。Carsten

はしかし知人の説得でこの仕事を引き受けるのであるが、残された娘 Juliane の魅力の虜となり、結婚してしまう。彼女は、父の喪に服するよりは早くダンスに行きたいと思うような女性であり、やはり Carsten からすれば異物であることに変わりはない。この異物を引き受けてしまったことの償いを、Carsten は一生かかってしなければならなくなる。Juliane は男の子を生んだ後産褥で死ぬのだが、残された息子 Heinrich は Juliane の相貌と気質を受けついだ人間であり、Carsten はこの息子に悩まされ通しになる。

根気がなく一つの仕事をやり通せない Heinrich が母の血を受けつぐ人間であることは、具体的な描写となってあらわれている。使いこみをして故郷の町を追われた Heinrich はハンブルクで別の仕事につき、やがて休暇をとって帰ってくるのであるが、息子が一人前になったと信じた Carsten は、息子からその母 Juliane に似た部分が後退したと考える。ところが後になって Heinrich がいささか眉唾ものの事業計画のことを話し始めると、またしても Juliane の顔が息子にあらわれたと感じるのである。(40) また、しばらくして故郷に戻ってきた Heinrich は結婚後投機的事業に手を染めるのだが、その誘い水となったのは彼の母方の親戚であり、ここでも Juliane の影は異物としての役割を果たしているのである。

しかし異物として登場するのは外国人投機家やその娘だけではない。Heinrich がハンブルクから帰ってきた時の服装や持ち物は都会人らしく洗練されたものであり、彼は母親代わりの Brigitte や後に結婚することになる Anna に大都会ハンブルクの話を得意げにする。(39) この大都会もまた、フーズムという小さな町に住みついた者にとっては異物に他ならない。後に、フーズムの或る商店を Heinrich のために買わないかという話を持ちかけられた Carsten は、息子をハンブルクから呼び戻そうと思ひこころ考える。「大都会の色々な特性が意志の弱い息子を誘惑してあらぬ方向に行かせたが、それはこの小さな町でなら起こり得ないことなのだ」(48)

Carsten の理想とする堅実な市民生活、それがフーズムのような小規模な町を背景に営むものと考えられていることが読みとれよう。作中、Carsten、Brigitte、Anna がフーズムの町を離れないのに対し、Juliane は外国人の娘であり、Heinrich は一時期フーズムを離れるのである。そして語りは常にフーズムの町を舞台とし、ハンブルク時代の Heinrich の動静は手紙を通して間接

的に読者に知らされるに過ぎない。良くも悪くもここには徹底的な排他性がある。誠実に生きようとする人間たちは土地と一体であり、そこに馴染まないというだけで既に異物の資格を付与されることになるのだ。⁹⁾

Heinrichの投機的な商売は失敗し、妻Annaや父Carstenの財産までが喰いつぶされてしまう。嵐と洪水に襲われた夜Heinrichは行方不明となり、ようやく異物の排除は完了する。Carstenは家も財産も失ってしまうのだが、かつてJulianeという女性と結婚したことの償いが、実にこれだけの犠牲を要した訳である。しかしここにペシミスティックなものだけを見るのは正しくはあるまい。その理由は本論の後半で述べる。

さて、Carsten Carstensという繰り返しの名前にはもう一つ別の側面がある。それは、こうした名前がいかに物語の主人公というに相応しい、ということなのである。前述の通り、物語の遊戯的な精神はAlliterationの含みを持った「Carsten Curator」という題に既にあらわれていた。⁹⁾ こうした傾向は別にシュトルムの専売特許ではなく、シェークスピアの「Love's Labour's Lost」、J・オースティンの「Sense and Sensibility」や「Pride and Prejudice」、前述の人の命名法に絡むがスタンダールの「Vanina Vanini」、或いは推理小説の古典であるE・フィルポットの「The Red Redmaynes」等、少なからず見られる。

しかしそれが物語の主人公にあらわれる時、語りの本質がより強く暗示されていると考えられはしないだろうか。例えば、E・A・ポーの小説『ウィリアム・ウィルソン』の出だしはこうである。「かりにしばらくウィリアム・ウィルソンとしておこう。なにもわざわざ僕の本名をあげて、僕の前のこの美しい紙面をよごすことはないからだ」¹⁰⁾ いかにも無造作に響きの似たファースト・ネームとファミリー・ネームをあげ、名前などどうでも良いかのようなそぶりを見せる。物語の書き出しとして実に見事な例だと言わなくてはならない。実際は一見無造作に見えて、この繰り返しの名と、この小説のドッペルゲンガー・モチーフとは密接な関係を持つように思われるが、ともあれこの書き出しによって読者はすんなりと虚構世界の中へ入っていくことができるのだ。

こうした繰り返しの名が多くあらわれるのはロシアの物語においてである。それはファースト・ネームとセカンド・ネームの一致という形においてではあるが、こちらを戸惑わせるほどに頻出する。例えば、ドストエフスキーの『永

遠の夫』でのパーヴェル・パーヴロヴィチやセミヨーン・セミョーノヴィチ、プーシキンの『ペールキン物語』中の『吹雪』でのガヴリーラ・ガヴリーロヴィチ、ヴェレサーエフの『鼠落しの中で』やA・H・トルストイの『恋』におけるフォードル・フォードロヴィチ等々管見の範囲でも少なくない。ロシアでの命名の慣習がこういった名を生み出すという知識を踏まえたとしても、¹¹⁾ なおそこには、人間の生き方が今は存在しない定型を持っていたかに見える、物語に相応しい時代の雰囲気や自然にあらわれると見えはしないだろうか。父の名が子へ、子の名が孫へと変わらずに受けつがれてゆくのと同じように、個性という偏頗な衣裳に惑わされない人間の姿がそこにあるような感覚を与えるのだ。ベンヤミンのエッセイ『物語作者』を思いおこそう。彼がここで言及しているロシアの作家レスコフの『自然の声』、その主人公はフィリップ・フィリップヴィチという名である。¹²⁾ ベンヤミンはこの名前のことについては何も述べていないが、物語の意義を論じたエッセイの中で例にあげられた作品の主人公がこうした名前を持つことは暗示的と言えよう。ドストエフスキー等の十九世紀ロシア作家が中世ロシア文学とつながりを持つことはつとに指摘されているが、¹³⁾ 原初的な物語性は上のような人物の名前の選択にもあらわれているのではないか。ちなみに、中世ロシアの物語にも、ヤロスラーフ・ヤロスラーヴィチ、イングワリ・インゴレヴィチといった名が見られるのである。¹⁴⁾

話がドイツ圏内からはずれてしまったが、要するに、繰り返しの名は物語に相応しいものであり、それを聞くことによって、物語に耳を傾ける原初的な雰囲気や生まれてくるのではないだろうか。ああ、物語が始まるのだなという気持ちや誘うものが、こうした名前の中にあるように思われるのだ。

では何故繰り返しの名は原初性につながっているのか。一つの答えは前述の通り人間の不変を暗示する効果があるという点であるが、音声面での考察も必要だろう。しかしこれは容易なことではない。同じ音を繰り返すことは詩の押韻に見られるように形式美につながるが、形式、すなわちかたちが人間に与える感覚を言葉で説明するのは至難の業だからである。ここでは考えられる理由のうち一つだけを述べておこう。

それは、同音の繰り返しは幼児の発音に特徴的なものだということである。¹⁵⁾ 周知の通り、幼児はアアアとかダーダーとか同じ音を続けて発声する癖があ

る。パパとかママという言葉は幼児のこうした癖に合わせて作られている。また、赤ん坊をあらわすヨーロッパ語——ドイツ語のBaby, 英語のbaby, フランス語のbebe——は、そこに見られる [b] 音の繰り返しからも分かるように、幼児のこうした喋り方によって作られた一種の擬声語である。¹⁶⁾ 音を繰り返すという行為のこの原初性が、物語るという行為の原初性と結びついて、登場人物の名前を選ぶ際にあらわれてくるのだと考えられないだろうか。

以上のような仮定をふまえた上で『管財人カルステン』に戻ってみよう。主人公のCarsten Carstensという繰り返しの名は、上で述べたような物語性の保証であると思われる。物語性ということはシュトルムの場合、彼が好んで用いた枠物語という形式と切り離すことはできない。枠物語は、本来の話が始まる前にそのための雰囲気作りを別の物語の形で行う訳で、いかにリアリズムの手法で書かれていようと、シュトルムの小説は決して現実の敷き写しではなく、物語を語る独自のfiktivな空間の中にあるのだ。『管財人カルステン』は枠物語ではない。が、枠の代用をこの名前がしていると考えられないだろうか。

本当は彼はCarsten Carstensという名で、小市民の息子であった。(7)

この出だしを読む者は、繰り返しの名前によって一気に物語空間の中に入っていくことができるのだ。ルカーチは、シュトルムの小説には口で語る性格があるとして、これは古い物語の伝統の復活だと言っている。¹⁷⁾ 一見リアリズム風の、市民が没落する悲惨な筋書きを持ちながら、現実とは別の次元の空間が読む者に感得されるのは、物語冒頭のこの繰り返しの名前のためであり、fiktivな空間を作り出す外枠の役割を、Carsten Carstensという名はただこれだけで成しとげてしまっているように思われる。

作品の始めの枠にこだわったついでに、作品の最後についても述べておこう。『管財人カルステン』の結末部分は、物語の筋を完全に離れて、宗教的な匂いすらただよう、現在形の文章になっている。これが作品冒頭の繰り返しの名と対応して、作品を締めくくる枠を形成しているのではないか。ボリス・ウスペンスキーによれば、文学作品における自然な枠の明白な例証となるのはフォークロアの伝統的な始めと終わりの文句であり、エピローグにおいては、或る登場人物に伴われていた共時的視点が包括的な視点に変わることがある、そして

こうした終わり方は、内的視点から外的視点への、つまり *fiktiv* な空間から日常への移行によって閉じられる昔話の終わりとして不可欠であるという。¹⁸⁾ シュトルムはこうした事情を作家として、おそらく本能的に知っていた。¹⁹⁾ 見方によってはリアリズム小説のぶちこわしとも受け取られかねない結語部分は、上記のような枠の必要性から生まれてきたと言えるだろう。

2. 男女関係の構造について

『管財人カルステン』は主人公 Carsten の結婚から晩年に至るまでを年を追って語ってゆく。この過程で幾つかの男女の組合せができるが、そこに共通したパターンが見られるように思う。ここから作品のひとつの読み方を導きだす試みを以下で行いたい。

結論から言えば、作中あらわれる四組の男女のカップルは、いずれも疑似的な近親相姦関係にあるのではないだろうか。

まず最初の男女の組合せ、主人公 Carsten と妻 Juliane のそれから見ていこう。²⁰⁾ Carsten は、投機家である父をなくした Juliane の財産管理を引き受けることで彼女と知り合う。この時 Carsten は既に 40 歳であった。彼が単に財産管理という事務的な関わり方をしているのではないことは、先に触れたように父の喪に服している先からダンスに行きたがる Juliane をいましめるシーンがあること (10) からも明らかである。つまりここで Carsten は若い Juliane の父の代わりになったのであり、その上で娘代わりの Juliane と結婚してしまうことになるのである。無論生真面目な中年男と遊び好きな美貌の娘のこの結びつきははた目にも危なっかしいもので、彼の妹の Brigitte も首を横に振るのだが、結局 Juliane の産褥死によってあっけない終わり方をしたことは彼には幸いであった。

次に来るのが Carsten と妹 Brigitte との関係である。彼女は兄嫁 Juliane の死後あとに残された甥の Heinrich を育てるだけでなく、一生結婚することなく兄 Carsten を支えて生きてゆくのである。兄と妹の共同生活は、さながら男女の結婚生活のようにも見える。といってもここには真の近親相姦、つまり性的なものの介入は認められない。作中そうした暗示は皆無であるし、また Brigitte が女性として美しく魅力的であったというような描写も一切なされてない。男性から見た女性には、大別してふたつの側面がある。ひとつは、

その美しさ、性的な魅力によって男を蠱惑する面であり、もうひとつは日常の雑事を片づけ子供を育てることによって男を支える面である。とすれば、先の Juliane は最初の面を、Brigitte は第二の面を体現した存在と言えるだろう。第三の関係に移ろう。Carsten の息子 Heinrich とその結婚相手 Anna との関係である。Anna は Carsten の親戚の娘で、幼時に親を失ったことから Carsten に引きとられて育ったのである。このことから分かるように、Heinrich と Anna は小さい時から兄妹のように育ったのであり、ふたりの結婚は兄妹同士の結婚と言ってよい。実際、Anna から Heinrich と結婚すると聞いた Carsten は驚いてこう訊きかえす。「なんでまた。お前たちはいつだって兄妹みたいだったじゃないか」(55)

次に第四の関係、つまり Carsten と Anna との関係に進むことにしよう。Carsten と Anna は二重の意味で父と娘の関係にあると言える。第一に Anna は小さい時に Carsten に引きとられて実子同様に育てられたからであるし、第二に Carsten の実の息子である Heinrich と結婚したからである。そして墮落した Heinrich が嵐の夜行方不明になり、Carsten が家も財産も失って粗末なあばら屋に移っても、Anna は子供と共に義父について行き彼と一緒に暮らすのである。仕事を止めてしまった Carsten は孫の世話だけが楽しみとなる。彼は孫を前にしながら Anna とこんな会話を交す。「おまえの息子だ、アンナ、まったくおまえの息子だ」「ええ、おじいさん、でもこの子はあなたそっくりの眼をしていますわ」(72)

ここには、Carsten の息子であり Anna の夫であった Heinrich のことは全く出てこない。Anna の息子は母 Anna の顔だちと祖父 Carsten の眼を受けついでいる——まるで Carsten と Anna との間にできた子供のようなものではないか！先に、この作品は Juliane によって入りこんできた異物の排除の物語だと述べたが、ここにその過程は終わりをみる。Juliane—Heinrich 的なものは Carsten の孫の顔立ちに見られない——それがその証拠に他ならない。そして Anna、この女性は Juliane と Brigitte を統合したものとしてあらわれる。男性を惹きつける美しさを持ち、それでいて Juliane のように遊楽に時を過ごすのではなく日常の仕事に従事することによって Carsten を支えてゆくのである。

こうしてみると、この作品は Carsten が理想的な女性にめぐりあうまでの

物語として読めるだろう。JulianeとBrigitteによって女性の二側面の一方にしか触れえなかった彼が、両方を兼備した女性Annaと出会い、義父一嫁という関係においてではあるが人生の最後を一緒に暮らすことになるのだ。『管財人カルステン』にベシミスティックなものだけを見るべきではないと先に述べたのはこのためである。彼は少なくとも或る種の幸福をここで味わったはずだからである。

さて、以上のような分析と読み方をした上で、疑似近親相姦的な構造と一人の男が幸福になる話とがどう関係するのかという疑問が当然出てくるであろう。この疑問に対しては、『管財人カルステン』と或る種の神話や民話の持つ構造の同一性を指摘することで答えたいと思う。

神話学者は旧約聖書士師記に見るイエフタの娘の話进行分析している。²¹⁾ それによれば、この物語は異民族の血の排除を描いたものであり、アブラハムが実子イサクを生贄にしかけた逸話の対極をなすものだという。イスラエルの勇士イエフタは外敵と戦うにあたって主なる神に誓願を立てて、もし自分が敵に勝つことができたなら、家に戻ってきた時家の戸口から最初に出てきて自分を迎えるものを主に燔祭として捧げようと言う。戦いに勝って帰ってきた彼を最初に迎えたのは実の娘であった。イエフタのただ一人の子供である彼女は二ヶ月の間自分が処女であることを嘆いた後、生贄となるのである。この理不尽な犠牲の物語はイエフタの出自に注意することで理解可能となる。彼は父が遊女との間にもうけた庶子であり、嫡子である兄弟たちにより家を追われていた。イスラエルが外敵によって危険な状態に陥ると勇士の誉れ高い彼は長老たちに呼び戻され、武勲をたてる。だがその役割を果たした後神の残酷な介入により娘を失い、外婚が生んだこの混血の勇士の血は途絶えざるを得ない。イスラエルという選民が外婚による純血の危機と外敵による政治的な危機とを二つながらうまく乗りきる物語として、イエフタの娘の話は読めるのである。

これに対して創世記のイサクの物語はどうだろうか。アブラハムはある日、妻サラとの間のただ一人の子イサクを生贄としてさしだすよう神に命じられる。アブラハムがそれを実行に移そうとした瞬間、神の使いの声かしてイサクは救われ、代りに雄羊が燔祭として屠られる。この筋の進行自体が先のイエフタの娘の話と正反対であることは明瞭だが、対蹠的な点はそれだけにはとどまらない。実はアブラハムとサラとは異母兄妹であり、イサクは近親婚によって

生まれた子なのである。アブラハム夫妻が百歳前後になるまで子を授からなかったこともそれと無縁ではない。にもかかわらず二人の結婚は神に祝福されたものであった。上記の試練が近親婚のタブーを克服する手段となり、イサクは純血の子として神に認知される。そしてイサクも、またその子ヤコブも近親婚を繰り返し、ヤコブを名祖とするイスラエル民族はアブラハムの父テラ以外の血は一切混じっていない純血の民族となる。こうした、外婚による混血の排除や、内婚による純血を危機を乗り越えて維持するといった類の話は、世界各地の神話や民話によく見られるという。

『管財人カルステン』をこうした神話と比較してみると、奇妙な対応関係が見いだされる。最初のJulianeとのCarstenの結婚は、本来よそのものである女性を自分の娘に見たてることによって内婚を偽装したものと解釈することができる。彼女の早い死が偽装の危うさを救いはしたが、外の血は息子Heinrichの中に残される。ここに導入されるのが養女Annaである。彼女がCarstenの親戚にあたることに注意しよう。Carstenの生活を自らは結婚せずに支えるBrigitteにしてもそうだが、これら女性は単に気質の面でCarstenと折り合うというだけでは足りないのだ。そこに必ず血のつながりがなくてはならないのである。妹と暮らすCarstenは娘Annaを息子と結婚させることで血の純化をはかったのだ。それが成功したことは、孫の顔だちについての先の分析で示した通りである。こうしてみると、Carstenの幸福が言わば内婚と切り離せないものであり、それが作品にあらわれた四つの疑似近親相姦を通して語られていることは明瞭と言ってよいのではないだろうか。無論それが小説としてあらわれる時、精神面でのつながりや、大都市と小都市の問題といった様々な肉づけをされるのは当然であり、また、どれが骨でどれが肉かは視点のおき方によって異なってくる。しかしシュトルムの小説が持っているこうした構造は、彼の作家としての本質を考える時決して看過してはならない点だと思われるのである。²²⁾

註

本稿は、日本独文学会北陸支部第15回研究発表会（1985年11月10日、金沢大学文学部）における口頭発表に手を加えたものである。

シュトルムの作品からの引用は下記の全集によって行い、本文中の（）内にローマ数字で巻数を、アラビア数字で頁数を示す。ただし『管財人カルステン』については、巻数のIIIを省く。

Theodor Storm : Sämtliche Werke in vier Bänden, Berlin/Weimar (Aufbau) 1982.

- 1) 人名については、主として次の二著によった。以下、いちいち断わらない。
Hans Bahlow : Deutsche Namenlexikon, Frankfurt a. M.(Suhrkamp) 1972.
Günther Drosdowski : Lexikon der Vornamen, Mannheim/Zürich (Duden) 1974.
- 2) Thomas Mann : Gesammelte Werke in 13 Bänden, Frankfurt a. M. (Fischer) 1974, Bd.VIII S.279.
- 3) 註1)を見よ。なお、シュトルムの或る作品にも次のように書かれている。
「Hansen という名は、私たちの地方には浜の砂ほどもあった」(VI,143)
- 4) Mann, a. a. O. Bd.IX S.247.
- 5) ebda, Bd.VIII S.285f.
- 6) 余談であるが、フーズムにある Theodor-Storm-Gesellschaft の会員名簿には Hans Hansen という人が登録されている。面白い偶然と言うべきだろうか。
- 7) Werner Bellmann (hg.): Erläuterungen und Dokumente, Thomas Mann Tonio Kröger, Stuttgart (Reclam) 1983, S.8.
- 8) それ故、繰り返しの名は自己回帰的なものを暗示し、主人公の土地への密着を象徴するとも受けとれる。
- 9) この作品の題名が何故 »Carsten Curator« であって »Carsten Kurator« ではないのかと問うことは無意味だろうか。ラテン語の語源を意識して Curator と綴るのがおかしいというのではない。だが、辞書の乏しい例から判断すると、当時は既に Kurator と綴るのが一般的だったように思われる。地域的な差や個人の好みの問題もあるから——シュトルムが現代なら k とする場合にも c と綴る傾向があっ

たことは否めない——断定は不可能だが、Alliterationへの傾きからCを選んだということもあるのではないか。彼が別の作品では Kurator と綴っていること (II 606), 書簡では C. C. という略記をしている箇所があることをつけ加えておこう。
Theodor Storm - Erich Schmidt Briefwechsel, Bd.1, Berlin (E.Schmidt) 1972, S.94.

Theodor Storm - Wilhelm Petersen Briefwechsel, Berlin (E.Schmidt) 1984, S.43.

- 10) 中野好夫訳による。
- 11) ロシアでは、クリスチアン・ネームをファースト・ネームとし、セカンド・ネームとして父から名をもらってつける (男なら・・・ヴィチ等) ので、ファースト・ネームとセカンド・ネームの一致が比較的良好におこった。ただし最近では余り見られないという。(この点については新潟大学教授黒沢岑夫氏の御教示をいただいた)
- 12) Walter Benjamin : Gesammelte Schriften, Frankfurt a.M.(Suhrkamp) 1977, Bd.II-2 S.460.
- 13) 中村喜和編訳 : ロシア中世物語集 (筑摩書房) 1970, 405 頁以下.
- 14) 同上. 191 頁, 229 頁.
- 15) 従って、名前ではなく普通の文章の中では、同音の繰り返しはスタイルの欠陥と見なされる。プルーストはバルザックの「公爵たちのこの才能 ce don des ducs 」という表現をひどく面白がったという。
マルト・ロベール (岩崎・西永訳) : 起源の小説と小説の起源 (河出書房) 1975, 221 頁.
- 16) 野蛮を意味するギリシア語起源の barbar も同様の作られ方をしているらしい。
vgl. Duden, Das Herkunftswörterbuch.
また、古い名前はこうした同音の繰り返しで作られていたのであり、これは現在でも例えば Mommsen などの名として残っているという。
Max Gottschald : Die deutschen Personennamen, Berlin (W. d. Gruyter) 1955 S.6.
- 17) ルカーチ著作集第一巻・魂と形式 (川村・他訳) (白水社) 1969, 139 頁.
- 18) ボリス・ウスペンスキー (川崎・大石訳) : 構成の詩学 (法政大学出版局) 1986, 191 頁以下.
- 19) 枠を作品につけるということは、単に物語の場合にとどまらず、芸術一般が要求す

る美感の問題なのではあるまいか。名取洋之助は、絵画や写真におよぼす額縁の美化作用について語っている。

名取洋之助：写真の読み方（岩波書店）1963. 40頁。

- 20) 近親相姦の範囲をどこに設定するかによって、この種の分析はシンボルハンティング的なものになりがちである。ただここでは次のことを指摘しておきたい。現代であれば近親相姦は生物学的に血縁関係にある者同士でしか問題にならないが、もともとは姻戚関係でしかない者同士でも問題にされた。例えば、旧約聖書のヨセフ物語で、ヨセフの兄ルベンが父ヤコブの婢ビルハと交わって長子権を剥奪されたのは（創世記35-22,49-4, 歴代誌上5-1），父の女を横どりしたからではなく、ビルハがヤコブの子を生んでいる以上彼女はヤコブの妻、すなわちルベンの義母であり、ルベンの行為が近親相姦に当たるからである。また、シラーの『ドン・カルロス』（この素材を扱っているのはシラーばかりではないが）でカルロスが王妃となったエリーザベトへの思いに悩むのは、ひとつには彼女が父の妻となったために自分の母に当たる人 を恋しなくてはならなくなったからである。

vgl. Otto Rank : Das Inzest-Motiv in Dichtung und Sage, Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1974.

- 21) 吉田敦彦：神話と近親相姦（青土社）1982. 105 頁以下。

なおこうした知見は、吉田が述べているように、E・リーチら現代第一線級の神話学者にはば共通するものと言ってよい。

- 22) 疑似近親相姦については、シュトルムがその作家としての性向にもかかわらず、様々な外的制約により直接的な表現を避けたという観点からもアプローチが可能であろう。この点に関しては、稿を改めて論じたいと考えている。

Versuch über Theodor Storms Novelle „Carsten Curator“

Atsushi MIURA

In dieser Abhandlung wird versucht, die Konstruktion von „Carsten Curator“ Storms von zwei Seiten her zu erklären.

1. Die Novelle fängt mit folgendem Satz an: „Eigentlich hieß er Carsten Carstens und war der Sohn eines Kleinbürgers, (...)“ Der Name des Helden ist durch die Übereinstimmung des Vor- und Familiennamens auffallend, und die Wahl dieses Namens ist bei Storm sicher nicht zufällig, denn er wählt in seinen anderen Werken für seine Helden ähnlich gleichklingende Namen, und eine Art Alliteration charakterisiert die Titel seiner Erzählungen. Darum kann man annehmen, daß das Wortspiel sich auf irgendeine Art auch hier auf das Wesen des Werks bezieht.

Der Name Carsten Carstens—die Wiederholung des gleichen Klangs—weist auf den Archaismus hin. Erstens sind die Namen der Menschen in den uralten Zeiten sogenannte Lallnamen, das heißt Namen wie die Wörter der kleinen Kinder. Man nennt sich z. B. Pippo, Toto, wie man „Mama“, „Papa“ ausspricht. Zweitens benutzt man vor alters (und auch jetzt) bei der Wahl des Vornamens manchmal seinen Familiennamen, wie bei dem berühmten Physiker Galileo Galilei (Galileo von der Familie Galileo). Drittens gibt es im Westen die lange Tradition, daß der Sohn den Namen des Vaters, der Enkel den des Sohns übernimmt usf. Der Name Carsten Carstens ruft also die uralten Zeiten im Herzen des Lesers zurück und bestimmt den Charakter des Werks: den erzählerischen Charakter, wie ihn die Märchen und Sagen hatten, worauf G. Lukács in seinen Aufsätzen „Die Seelen und die Formen“ hinweist.

Der Name des Helden leitet andererseits den Ersatz für

die Rahmen der Erzählung, die dem Anschein nach in dieser Novelle nicht gesetzt worden sind. Am Ende des Werks schafft zudem eine eigenartige Redensweise eine Art Rahmen, indem sie durch ihren auf die Gegenwart gerichteten Inhalt und Tempus den Leser von der Erzählwelt zum Alltagsleben zurückführt.

2. Die Beziehungen zwischen Mann und Frau, die in diesem Werk in vier Konstellationen erscheinen, besitzen dieselbe Konstruktion: Pseudo-Inzest.

Die erste Beziehung ist die zwischen Carsten und Juliane. Das ist sozusagen Heirat zwischen Vater und Tochter, weil Julianes leiblicher Vater gestorben ist und Carsten als Curator die väterliche Rolle spielt. Die zweite Beziehung ist die zwischen Carsten und seiner Schwester Brigitte. Sie bleibt ihr Leben lang unverheiratet und unterstützt ihren Bruder und Neffen durch die Haushaltsführung. Brigitte ist eine Art Frau Carstens, nämlich von der Seite des Haushalts, aber nicht über die Sexualität. Die dritte Beziehung ist Heinrichs Heirat mit Anna, einer Verwandten des Helden, die als Kind von Carsten zu sich genommen und wie eine Schwester Heinrichs erzogen worden ist. Diese Heirat entspricht darum der zwischen Bruder und Schwester. Die vierte Beziehung ist die zwischen Carsten und Anna. Sie leben mit Carstens Enkel zusammen, nachdem Brigitte und Heinrich gestorben sind. Der Enkel ist dem Großvater und der Mutter ähnlich, so als ob er das Kind von Carsten und Anna sei.

Das führt zum Vergleich dieses Werks mit Märchen und Sagen, wo oft eine Handlung erscheint, in der das von Gott erwählte Volk durch Inzest sein Blut zu reinigen versucht. Diese Handlung ist auch bei „Carsten Curator“ zu erkennen. Die Heirat Carstens mit Juliane ist nämlich eine Tarnung: Während sie in Wahrheit die Tochter eines Fremden ist und das fremde Blut sich mit dem Carstens durch die Heirat mischt, spielt Carsten sich als

Julianes Vater auf und behauptet damit vergebens, diese sei eine interne Heirat und mache das Blut nicht schmutzig. Danach kommt der Prozeß der Reinigung des Blutes. Daß das mit Erfolg geschieht, wird dadurch bewiesen, daß aus dem Antlitz des Enkels die Merkmale von Juliane und Heinrich verschwunden sind.